

# 多文化社会ドイツに生きる「私」を物語る試み

—— ドイツ版「フリーダム・ライターズ」の取り組みから ——

伊 藤 亜 希 子\*

## 1. はじめに

多文化社会といえども、そこに存在する文化はすべて平等に扱われているわけではない。マジョリティとマイノリティがそれぞれ持つ文化の間には顕在的であれ、潜在的であれなんらかの権力関係が存在する。そのような多文化社会において、多様性を持った個である「私」は、マジョリティの人々から「われわれ」とは異なる「かれら」と十把一絡げにされるなかで、どのように自己を見つめ、他者に対し自己表現を行い、多文化社会という「私」が生きる社会に参加していくことができるのだろうか。単純化された「かれら」という像と実際の「私」との違いに違和感を持ったり、排除されていると感じたり、「私」という個人の中にある多様性が理解されないことに苦しんだりしている人々もいるだろう。また、そうした「私」を「かれら」ではなく、共に生きる社会を築いていく構成員として位置づけていくために、積極的に「私」自身の声や思いを発信していく手段を見いだしている人々も存在するだろう。しかし、そうして発信された数多くの「私」の声は、それでもマジョリティの規定する「かれら」の枠に押し戻されてしまうこともある。

---

\* 福岡大学人文学部講師

これは、多文化社会ヨーロッパに暮らすムスリムの置かれた状況を想定するとイメージしやすいだろう。2014年秋以降、ドイツにおいてはペギーダ (PEGIDA, Patriotische Europäer gegen die Islamisierung des Abendlandes. 西洋のイスラム化に反対する愛国的欧州人) による反イスラムデモが繰り返し広げられ、ドイツ国内にとどまらず、ヨーロッパ諸国に飛び火している。また、2015年1月にフランスで起こったシャルリー・エブド事件をはじめ、デンマーク、ベルギー、ドイツ、イギリスなどヨーロッパ各国におけるムスリム移民によるテロが反イスラムの空気をさらに高める結果になっている。これらによって、「われわれ」が重視するヨーロッパ的価値観を認めない他者としての「イスラム」像が作り上げられ、その「ムスリム」、すなわち「かれら」の像にすべてのムスリムを当てはめるような構図が作り上げられている (マンスール、2016)。もちろん、これに反して、このような単純な構図ではなく、過激主義に傾倒していったムスリム移民とその他多くを混同すべきではないとも指摘されている (同上)。

こうした状況の中で、ムスリムの若者たちも自分たちの声を上げている。例えば、ドイツにおいてはペギーダのカウンターデモにムスリムの若者たちが参加し、自身の声を詩という形で発信したり、短いビデオクリップを作成したりしている<sup>1</sup>。イスラム的価値観を大切にしながら、ドイツ社会に元々存在する価値観、社会の在り方に理解を示し、ドイツ社会の一員として社会に働きかけようとしている。「われわれ」と「かれら」ではなく、ドイツ社会を構成する多文化的市民としての「私」の思い、「私」の考えを発信することを通じて、共に生きる一つの社会を構築しようとしているとも受け取れる。

当然のことながら、こうしたヨーロッパ的価値観とイスラム的価値観の衝突、そして「われわれ」と「かれら」の枠内に当てはめられることに対し声を上げ

<sup>1</sup> ムスリム青年たちが自身の日常やイスラムに対して西欧社会が抱くイメージを自身がどのように捉えているのかといったことをテーマに詩を作成し、それを発信している i.Slam というグループが例として挙げられる。

ることは今に始まったことではない。このような状況の中で、共生と排除の狭間に生きる「私」に向き合い、他者へ「私」を伝えることばを紡ぐことのできる青少年はそう多くないかもしれない。しかしながら、多文化社会においてマジョリティとは異なる文化的背景を持った青少年が、自身のことばを紡ぎ、発信していくことは、マジョリティの文化に規定された社会の在り方を問い直す上で非常に重要なこととなっていく。

こうした背景を踏まえ、本論は、移民青少年が多文化社会ドイツの日常に生きる「私」を物語る試みの一つとして、ドイツ版「フリーダム・ライターズ」の取り組みに着目し、そのなかでかれらが自己をどのように捉え、自己表現し、それがいかに他者との相互理解の契機となったのか、この試みの可能性と課題を考察することを目的とする。ドイツ版「フリーダム・ライターズ」については、次節で詳述するが、本論ではその活動の成果として出版された活動記録と日記の一部を素材に考察を進める。移民青少年の日常に即したことばを引き出し、かれらのエンパワメントに資するこの試みは、異文化間教育の目的に鑑みても意義深いものである。こうした実践から、多文化共生を実現していくための青少年教育の在り方についても示唆を得たい。

## 2. 「私」を物語る試み—ドイツ版「フリーダム・ライターズ」—

本論で取り上げるドイツ版「フリーダム・ライターズ」について述べる前に、「フリーダム・ライターズ (Freedom Writers)」の教育実践を確認しておきたい。「フリーダム・ライターズ」は、アメリカのロサンゼルスにおけるロス暴動後の人種間対立が顕著になっていた高校において、英語科の教師であるエリン・グルーウェル (Erin Gruwell) が1990年代後半から2000年代にかけて取り組んだ教育実践である<sup>2</sup>。高校の教師から期待されず、見放されていると感

<sup>2</sup> この教育実践については、2007年に映画化され、日本でも上映された。また、グルー

じていた移民生徒に対し、かれらが興味を持って読み進めることのできる文学作品を与え、そして、それぞれに日記を綴らせることで移民生徒をエンパワメントしていった。

「フリーダム・ライターズ」に関する先行研究としては、グルーウェルの教育実践の概要を示した Lundmark (2007) や、これを多文化教育の実践として位置づけ、人種間の偏見の低減や対立の解消に至った点を社会心理学の視点から分析した小川 (2010) などの研究が挙げられる。これらの先行研究は、グルーウェルの教育実践全体を評価し、分析しているものの、移民としての背景を持ち、多文化社会に生きる「私」に向き合い、自己を表出することの可能性に注目した分析はなされていない。また、ドイツにおいても、「フリーダム・ライターズ」の日記としての価値に注目した言及は見られるものの (Bensberg 2013)、その実践そのものへの注目は本論で取り上げる実践を主導したクニュフケン (Knüfken 2012, 2013) しか管見の限りない。

では、クニュフケンが取り組んだドイツ版「フリーダム・ライターズ」について、概要を確認しておこう。クニュフケン は移民人口の多いノルトライン・ヴェストファーレン州 (NRW 州) の学校で社会教育士 (Sozialpädagoge) として働いており、基幹学校 (Hauptschule) における週 1 回の課外活動として「フリーダム・ライターズ」と同様の活動を試みた。2009/2010 年度に開始した当初の参加者は、4 名の女子生徒、6 名の男子生徒の 10 名で、1 名がセルビア系、残り 9 名がトルコ系移民の青少年であった。かれらは「チーム“将来” (Team „Zukunft“)」と命名され、フリーダム・ライターズの青少年と同様に、日記を綴ることになる。ドイツ語を母語とせず、ドイツ語を聞き、読み、書くことに集中力を要するかれらは、約 2 年間の活動のなかで徐々に自分たちのこ

---

ウェルは、「フリーダム・ライターズ財団 (Freedom Writers Foundation)」を設立し、アメリカ国内外において、生徒との関係構築やかれらのエンパワメント、そして学力保障に至った彼女の教育実践の普及に精力的に取り組んでいる。詳しくは、Gruwell (2007, 2009) を参照のこと。

とばを獲得し、日記に日常の自分自身を綴り、オランダのアンネ・フランク・ハウスへの研修旅行やグルーウェルとのスカイプ会議を実現していく。このプロセスにおけるクニユフケンの生徒に対する働きかけやかれらの反応について、クニユフケンと生徒らによってまとめられた日記の一部と活動の記録から整理していきたい。

## 2-1. 活動内容の模索

### —映画「フリーダム・ライターズ」の視聴から「日記」へ—

課外活動の第1回目が始まる前、クニユフケンは課外活動プロジェクトで何ができるか、どのような成果を得られるか、期待を膨らませていた。しかし、彼が最初に出会った生徒の姿はあまりにも衝撃的なものであった。彼は日記に次のように記している。

ひどい。野獣の叫びのよう。もちろん、トルコ語で。とにかく静かにさせたい。毎週映画でも見ようか。そうすれば、生徒も静かになるし、自分も悩まされずにすむ。  
(2010.02.23 課外活動初日) (Knüfken mit Teilnehmern des Projektes, 2013, S.12)

彼は当初、チーム・ビルディングとそれを発展させるうる協同学習のプログラムを実施することを考えていたのだが、こうした生徒たちを前にしてそれが不可能であると知り、とりあえず生徒に映画を見せるために、Amazonで映画を探すことになる。彼は別の映画の視聴を考えており、それをチェックしていた際に、偶然、「フリーダム・ライターズ」の映画を見つけた。困難な生徒たちと勇敢な教師による学校を舞台とした物語であることから、そのDVDと書籍を購入した。そして、DVDを視聴し、彼は次のように思いに至ったのである。

ロサンゼルス of これだけ困難な青少年たちが変わることができるのだから、自分の

生徒たちだって、変わることができるに違いないのではないだろうか。(2010.02.27)  
(ebd., S.14)

そして、彼はチーム“将来”に4つの課題を課して、それをこなすことができた生徒をアムステルダムへの日帰り旅行へ招待しようと考えた。その4つの課題とは、次の通りである。第一の課題は、映画「フリーダム・ライターズ」を視聴することである。第二の課題は、グループ全体で「フリーダム・ライターズ」の日記を読むことである。「フリーダム・ライターズ」の日記には、142の日記が含まれており、これを生徒に等しく配分し、それぞれが12の日記を読むことにした。第三の課題は、生徒それぞれが定期的に自分自身の日記を書くことである。生徒がそれを許せば、クニユフケンが生徒の日記を読む。そして、第四の課題が、「フリーダム・ライターズ」の生徒たちがしたように、それぞれの生徒が『アンネの日記』を読むことである。

このようにクニユフケンプロジェクトの課題を設定し、生徒と活動を行っていきこうと決めた。活動の流れとしては、まずは「フリーダム・ライターズ」の映画鑑賞を行い、その後、「フリーダム・ライターズ」の日記を全員で読み進めた。それから、『アンネの日記』への導入として、「シンドラーのリスト」を鑑賞し、クニユフケンが生徒それぞれに『アンネの日記』をプレゼントし、各自が読み進めていった。これらと並行して、生徒自身も日記を綴っていった。また、チーム・ビルディングのためのグループワークなどにも取り組んでいった<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> クニユフケン、メタログ社 (Metalog) が開発したトレーニング・ツールを活用した。このトレーニング・ツールは、生徒が協力し合わないと解決できないゲームや練習課題を含むものであり、コミュニケーション能力の向上にも寄与するものである。詳細は、メタログ社 HP を参照のこと。

## 2-2. 自尊感情の低い生徒とかれらに対する教師のまなざし

ここで、クニユフケンから見た生徒の姿を詳しく見ておきたい。課外活動のはじめこそ、生徒に対してネガティブな印象を持っていたが、彼は活動を進めるなかで、生徒らを観察し、生徒の状況把握に努めていた。それはクニユフケン自身も記していた日記から読み取れる。

- ・ 生徒たちは自分のことを疑いの目を持って見ている。(2010.03.01) (ebd., S.16)
- ・ 子どもたちの実態。すべての生徒にとってドイツ語は第二言語なんだから、集中力が欠けるのは当たり前だ。(2010.03.08) (ebd., S.18)
- ・ 生徒の様子。ここにいないくはいけない不満と自分自身に対するあきらめ。互いをバカにし合う。(2010.04.12) (ebd., S.22)
- ・ 多くは期待しないけれど、自分自身を尊重してほしい。(2010.05.10) (ebd., S.28)

クニユフケンが生徒に対してネガティブな印象を抱いたのと同様、生徒たちも彼に対し、懐疑的なまなざしを投げかけている。これは生徒らがドイツ人の大人から「問題の多い移民生徒」と偏見を持たれているという意識を反映しているともいえる。かれらにとって、クニユフケン自分たちに対する偏見を持っている「ドイツ人」の大人の一人に含まれるのである。

生徒にそのように思われていると感じながらも、クニユフケン生徒がなぜ「問題が多い」と捉えられてしまうのかという点を生徒の様子を観察することによって分析している。そこで彼は、移民生徒を取り巻く多言語環境や置かれている状況に対する不満、そして家庭や学校、社会に起因する要因から、自分自身の将来を展望することができず、あきらめに至っている様子を捉えている。そして、そうした自尊感情の低さから生徒同士で互いを卑下し合っている様子もまた描かれている。

生徒の持つこのような低い自尊感情は、教師が移民生徒に向けるまなざしと

も関係している。先に述べたように、ドイツ人の大人が自分たちを「問題の多い生徒」と捉えるように、学校の教師もまた自分たちをそのように捉え、本当の姿を理解しようとせず、距離をとろうとしていると生徒は感じている。そして、教師について日記に次のように記している。

- ・ 担任の女性の先生とうまくいかない。小さな質問も職員室に行かないといけなし、先生たちは自分を追い出そうとする。(2010.03.15 生徒1) (ebd., S.110)
- ・ 先生から不当に扱われている。(2010.04.21 生徒1) (ebd., S.111)
- ・ 好きな先生は自分たちに公平に接してくれる先生。どうしてクラスの先生はそうしてくれないの？(2010.11.30 生徒5) (ebd., S.129)
- ・ 先生には自分のことを理解し、尊重してほしい。そしたら、自分もそうするのに…(2010.11.30 生徒6) (ebd., S.136)

生徒が記しているように、生徒たちは教師から不等に扱われているという不満や理解されていないという思いを抱いている。これは、生徒からしてみれば、ドイツ社会が自分たちに向ける偏見のまなざしと同じまなざしを教師も持っており、自分たちの存在が厄介者扱いされていると捉えざるを得ない。そうした教師のまなざしが、生徒の自尊感情を低くしている要因の一つになっていると考えられうる。

このような生徒の自尊感情の低さを生み出すような環境の中で、クニユフケンは課外活動を通して少しでもかれらの自尊感情を高めようとする。

生徒が自分自身の力を信じなくてはいけない。かれらが本(『アンネの日記』)を1冊全部読むなんて、他の人は信じないだろうけど、他の人が考えている以上に生徒たちはできるんだということを証明するんだ。(2010.06.21) (ebd., S.37)



「フリーダム・ライターズ」でグルーウェルが行ったように、クニユフケンもまた生徒が達成感を味わえるような課題を課し、課題を達成する力を自分たちが持っているということを生徒自身に理解させると同時に、生徒の力を信じていない教師に対しても理解させようと考えたのである。

### 2-3. 自己を見つめ直す兆しから支え合う関係へ

「フリーダム・ライターズ」の映画を鑑賞し、自分たちで「フリーダム・ライターズ」の日記や『アンネの日記』を読み進め、チーム“将来”のメンバーとともに時間を過ごすことで、生徒同士の関係性が徐々に作られていった。映画「フリーダム・ライターズ」にも出てくるラインゲームに、チーム“将来”のメンバーも取り組んだが、クニユフケンはこのゲームは概してうまく進んだと捉えている。ラインゲームは、生徒を2列に分け、その間に線を引き、質問に対して「はい」と答えるのであれば、その線のところに一歩進むというものである。質問は生徒が答えやすいものから、徐々に答えにくいような生徒のプライベートに関する質問も取り上げる。

このゲームを行った際、生徒は自分たちが映画の中でも行われていたラインゲームを行うことに肯定的であり、ほとんどは質問に対し正直に答えていた。質問に対してことばで答えることをしないため答えやすいと感じた者や、質問に対して自分と同じように回答する者を見て共通性を見出せたのがよかったと感じた者、プライベートに迫る質問についても個々に質問されるのではなく、全員に向けて質問されそれに答えるので、お互いのことをよく知ることができたと感じる者など肯定的な反応が生徒の日記には記された (ibd., S.28-30)。このようなプライベートに関わる答えにくい質問に対しても正直に生徒が答えているのは、2010年2月下旬に活動を開始して、3か月弱の間活動を共にしてきたことで、生徒同士の間でも、またクニユフケンに対しても正直に答えてもいいと思える雰囲気できたことによると捉えることができる。

こうした雰囲気は、その後のアクションデー「変化に乾杯 (Toast for Change)」でも見られる。これも「フリーダム・ライターズ」に見られる活動であるが、クニユフケンは生徒に画用紙を配り、そこにシャンパングラスの絵を描かせ、そのグラスの中に自分の願いやチャレンジしたいことを書かせた。そして、それをメンバー全員の前で発表し、ノンアルコール・ドリンクで自分たちにこれから起こる変化に乾杯する。生徒はその際、次のような願いや求める変化を読み上げている (ebd., S.33)。

- ・ 学校にもっとなじんで、家族の言うことをいつもよく聞いて、世界中の誰とも喧嘩をしないような生き方にしたい。
- ・ 自分はすでに何かが変わり始めているし、それを最後まで実現させたい。
- ・ 自分に対して優しくになりたいし、先生にもいい態度を取りたい。
- ・ 自分自身のことをもっと尊重できるようになれば、他には何も変える必要はない。
- ・ 学校でもっと成長したいし、禁煙したい。
- ・ 自分は変わりたいし、先生たちのことをもっとリスペクトしたい。そうすれば、先生たちも自分のことを認めてくれるだろうし、10B (基幹学校の最終学年) を修了できると思う。
- ・ 学校にいても、家で家族にいても、友達にいても、自分は幸せでないから、自分の生活のすべてを変えたい。
- ・ 学校で成長したいし、自分の態度は改めるべきだと思う。いい成績が取れるなんて自分でも思わなかったけど、達成できたし、9年生になりたい。

ここに現れているように、生徒は自分を良い方向に変えていきたいと思っており、また他者を尊重したいという思いも有している。「変化に乾杯」の活動で、生徒は前向きに「自分がこうなりたい／こう変わりたい」という変化について語り、目標を共有しており、率直に思いを語る雰囲気ができあがっている。

る。そして、この活動そのものについて、生徒は日記に次のように記している。

- ・ 「変化に乾杯」のワークをしていたら、いつの間にかいろんな考えから自由になった。多くを変える必要はないんだ。ありがとう、Hr.K<sup>4</sup>。(2010.05.20 生徒1) (ebd., S.111)
- ・ 今日は特別な一日だった。自分の変化についてメモをして、みんなの前で発表した。最初、みんながどんな反応をするか不安だったけど、うまくいった。突然、新しい気持ちになった。Hr.Kはソーシャルワーカー以上だと思うし、彼のことをますます信頼している。バイバイ。追伸：Hr.Kのところでは今日は一番の日だった。(2010.05.20 生徒2) (ebd., S.115)

正直に自分が変わりたいと願う思いを語ることを、他の生徒にどのように受け止められるか不安に思っていた様子も窺えるが、率直に自分の思いを語り、それが他の生徒に、そしてクニユフケンに受け入れられたことを非常に肯定的に受け止めているといえる。このように生徒同士の関係性が構築され、他者への尊重やそれと併せて他者による受容が実感を伴って現れており、生徒間の信頼関係が生まれていることが窺える。それは、日記の次の一節からも明らかである。

「フリーダム・ライターズ」で自分が変わった。以前よりもずっと自覚的になったし、相手をもっと尊重するようになった。(2010.05.31 生徒6) (ebd., S.135)

こうした生徒の変化は、クニユフケンの生徒の見取りのなかにも現れるよう

---

<sup>4</sup> 「フリーダム・ライターズ」の生徒らがグルーヴェルのことを親しみを持って、「Miss G」と呼んでいたように、生徒はそれに倣い、日記の中でクニユフケンのことを「Herr K」と記している。

になる。

現段階での生徒の様子をまとめておきたい。2、3人はアムステルダムに必ず行けるだろう。その他の2、3人はおそらく大丈夫だろう。それ以外の数人は課題をこなすことができないだろう。…（中略）特に目を引く生徒が一人いる。彼についてはとても心配しているし、先週は机に突っ伏して、昨日は座っているだけで冗談を言っていた。その彼が、自分がいつも口にする「できるよ！」ということばを、ほとんどいつも黙っている男子生徒にかけて、楽しんでた。彼がほとんど日記も書かないこととの関連にそこで気づいたのだが、まさしくこれが彼が今できるベストなのだとことだ。また、その他に2人の生徒を見ていると興味深い。かれらは何かしたい、成長したいと思っているが、まだうまくいっていない。この二人にとっては週に一度90分だけでは短すぎるということは明らかだ。(2010.06.22) (ebd., S.38)

クニユフケンはこのように生徒の様子を見取っていたが、彼自身も十分に生徒のことを理解していなかったと思わされることもあった。結局のところ、先述のクニユフケンの見取りの通り、課題をすべてこなし、アムステルダムと一緒に行くことのできた生徒は4人だけだった。そのときのことを、クニユフケンは日記に次のように綴っている。

今、アムステルダムからの帰り道。結局、チーム“将来”からは4人しか一緒に行けなかった。いつもだったら、みんな頑張ったので「いいよ、みんなで行こう」と言ったと思うけれど、今回はそれは正しいことではないと思った。他の生徒も自分が最後は「みんなで行こう」と言うと思っただろうが、今回はそれはなかった。またここから出発して、次は他の生徒も一緒に行こう。アムステルダムは良かったけれど、アンネ・フランク・ハウスの入場券を事前に準備しておくべきだった。…（中

略) それに、自分は生徒がそんなにもアンネ・フランク・ハウスに興味を持っているなんて思わなかった。自分は時折理解がついていかなかったり、生徒のなかで変化が生じ始めていることを十分に理解していないと思った。一緒に旅行したみんなに、良い旅行になったことを感謝したい。(2010.07.08) (ebd.)

これまでの活動を通して、生徒らはクニユフケンの想像以上に、アンネ・フランクに興味をしていたことが窺える。活動の一つとしてクニユフケンは、『アンネの日記』の講読を生徒に取り組みさせていたが、それがどれほど生徒に響いていたのかというところは、彼の想像以上であったのだろう。アムステルダムへの日帰り旅行で、アンネ・フランク・ハウスの見学が叶わなかったことを残念に思っている生徒の姿に、クニユフケンはまたも驚かされたのである。

こうして活動をともし、生徒の変化に触れて、クニユフケン自身も変化していく。

- ・ ここ数ヶ月にわたって、難しい生徒の対応の中で自分の意識が明らかに高まった。生徒らを問題のあるケースと見なすことがなくなったので、自分がみんなと一緒にいたいと思うようになった。こうした感情は、グループに対して過度に注視することがなくなったことにつながっている。また、どのようにすればうまくやってくれるかということが分かってきたので、それについて思い悩むこともなくなった。生徒の対応にかなり自信が持てるようになり、よりゆとりが生まれているようになった。そのことに生徒も気づいていて、緊張が走ることもほとんどなくなった。(2010.09.23) (ebd., S.45)
- ・ (生徒の演劇を見て) こうした類いの能力がもっと考慮されればいいのに。能力への評価の代わりに、「何もできない」、「社会の役に立たない」生徒だというシニカルなコメントばかりいつも耳にする。その逆であることを認めなくてはならないのに。(2010.12.22) (ebd., S.61)

- ・ 今朝学校に行く途中に、自分の中に抵抗感が高まるのを感じた。(学校では)とても良いこととは呼べない、理解したくないことが多い。問題を自分たちで作っているのだ。生徒の逸脱行為が教師に一方的に否定的に受け止められるのをたびたび目にした。生徒に対する蔑視的なコメントが多くを占め、生徒への対応も建設的なものになっていない。学校の日常のこうしたことを、安易にこれ以上受け入れられない。ここ1年、常にそう感じている。ここ1年? ここ1年の話ではない? ああ、おそらく1年前にチーム“将来”を初めて立ち上げてからだ。(2011.02.09) (ibd., S.66)

ここに取り上げたクニユフケンの日記の引用からは、チーム“将来”を立ち上げ、活動を共にし過ごしてきたなかで、彼自身が生徒を理解し、生徒に寄り添っていく様子が窺える。そうしてかれらに対する理解が深まっていくなかで、「ドイツ人」に位置していたクニユフケンは、「問題の多い移民生徒」に位置けられる生徒の側から、教師や学校の様子を捉えるようになっていく。これは、生徒の可能性を信じない教師の姿や学校の日常に対する違和感が示される記述から読み取ることができる。

このようにクニユフケン自身が生徒理解を深め、変化していくなかで、クニユフケンと生徒の関係性も変化している。「変化に乾杯」の活動についての生徒1と生徒2の日記を先に取り上げたが、そこには、クニユフケンに対する生徒の信頼と感謝が記されており、クニユフケンと生徒の間に信頼関係が構築されている様子が窺える。そうした互いの間に築かれた信頼関係は、次のクニユフケンの日記からも読み取ることができる。

「フリーダム・ライターズ」の映画の中で、「203教室に来ると家にいるようだ」と言われていたように、自分も少しそのように感じる。自分も Miss G. と同じように感じると伝えようとした。こうした振る舞いについて、少し嘘っぽく聞こえるので

はないか、特に「厳しい状況にある少年たち」にはむしろ笑われるのではないかと  
思い、しばらく考えた。反応は自分が思っていたのとは全く異なっていた。ほとん  
どの生徒が自分を見て、静かにうなずいていた。（2010.09.16）（ibd., S.42）

自分もグルーウェルがそう感じたように、今、生徒といることを心地よく感  
じていると伝えようとクニユフケンは思ったが、映画の台詞に出てくるような  
ことばを生徒に投げかけても、生徒から馬鹿にされるかもしれないと彼は思っ  
ていた。しかしながら、そうした彼の予想は良い意味で裏切られ、生徒らは彼  
のそのことばを素直に受け止めていた。それは、これまでのクニユフケンと生  
徒との関わりやそれによって生まれた関係性によるところが大きいだろう。こ  
のような言う方も言われる方も一見気恥ずかしくなるようなことも、表面的な  
ものとしてではなく、素直に発したり、受け止めたりすることができるような  
雰囲気はクニユフケンと生徒の間に生じているといえるだろう。こうした雰  
囲気が、先に挙げたクニユフケンの日記（2010.09.23）に記されているように、  
クニユフケンの生徒に対する対応に余裕をもたらしたり、生徒の緊張感を大き  
く低減させることにも寄与している。

クニユフケン、生徒が丸一日授業のない日に、プロジェクト全体を振り返  
るノスタルジー・デーを設定している。その際、映画「フリーダム・ライターズ」  
を再度鑑賞し、ところどころ止めながら、「フリーダム・ライターズ」に  
出てきたグループ・ワークに新たな設問で取り組んでみたり、シーンに関わる  
日記を再度読み返したりした。また、自分の記している日記についても読み上  
げたりしている。この日のクニユフケンの日記を見ると、次のような生徒の雰  
囲気が記されている。

みんなで日記を再び読んでいるときの雰囲気には、いつも驚かされる。かれらは何  
かしら「特別なもの」になっていることに気づいていない。もし自分がそれをかれ

らに伝えても、かれらは信じないだろう。これから先、さらにどう進んでいくのかわくわくしている。とても素晴らしいのは、この日が来るのを心待ちにしていたことだ。「仕事」がこんなにも喜びになる日を。(2010.11.30) (ibd., S.57)

クニユフケン、このノスタルジー・デーで活動全体を振り返りながら、生徒が互いにとって「特別な」存在になっており、かれらと共に時間を過ごし、変化を目の当たりにしてきたクニユフケンにとっても生徒が「特別な」存在になっていることが窺える。互いにとって、このように「特別」であることは、チーム“将来”がクニユフケンの誕生日を祝ったときの日記からも読み取ることができる。

チーム“将来”の活動時間になり、ようやく自分の部屋に入ると、そこはキャンドルの明かりで包まれていた。紙テープや風船、誕生日ケーキとノンアルコールのスパークリング・ワイン、ビスケットがあった。それからは90分間、屈託のない、静かな、ジョークを交えた楽しい時間が続き、そしてその時間は真剣な時間でもあった。何というべきなのだろう？ 暖かく、心のこもった雰囲気は本当に最高のプレゼントで、この時間はみんながとても気持ちに正直になっていたと思う。…(中略) みんな、信頼と尊重の気持ちが示されれば、落ち着いて、尊重に満ちた態度をとることができるんだ(2011.02.10) (ibd., S.67)

活動開始当初、生徒は自分たちに偏見を持つ「ドイツ人」の一人としてクニユフケンのことを捉え、またクニユフケンも当初は世間で言われるところの「問題のある移民生徒」と捉え、両者は「ドイツ人」と「移民生徒」の二項対立関係にあった。しかしながら、約1年もの間、一緒に活動を行うことを通して、「問題のある移民生徒」という偏見に押しとどめられたくない、変化したいと願う生徒とそのような生徒に真剣に向き合うクニユフケンとの間には、先の二



項対立とは異なる、互いに理解し、尊重し合う関係性が構築されていったのである。

#### 2-4. 成し遂げることによる自信の獲得—グルーウェルとのスカイプ会議—

こうした生徒自身の積極的な変化は、活動を通して得られた達成感や自分たちもできるという自信を得たことによる。そのようななか、生徒はさらに大きなことを成し遂げようと計画を立てることになる。それが、「エリン・グルーウェルを呼ぼう」というものである。クニユフケンは単純に有名人を呼べるなら、誰を呼びたいかという質問を生徒に投げかけたところ、生徒から「エリン・グルーウェル」という名前が挙げられた。クニユフケンは驚きつつも生徒のそうした声を無視することなく、フリーダム・ライターズ財団にメールを書いてみることにした。かれらが取り組んでいる活動の報告とそれが「フリーダム・ライターズ」と密接な関係があるということ、そして生徒の様子をメールにしたため、グルーウェルが返事をくれるか待ってみることにした (ebd., S.57-58)。

返事は1週間のうちにあり、「グルーウェルは予定が詰まっており、ドイツに出かけることは難しいが、スカイプ会議を行うのはどうだろうか」と彼女のマネージャーから提案された。このメールをクニユフケンが翻訳し、生徒に伝えたが、生徒は彼女が来れないということがわかり、非常に落胆した。彼女に直接会いたいと思っていたかれらは、スカイプ会議を行おうという提案についても、非常にネガティブな反応を示したが、生徒の一人が、「自分一人であってもいいからやりたい」と声を上げた。その瞬間、他の生徒たちもそれまでの否定的な反応と打って変わって、「やろう」ということになり、スカイプ会議の実現に向けて動き出した (ebd., S.61)。

生徒らは自分たちでグルーウェルに質問することを考え、ドイツ語から英語への翻訳は英語科の教師が支援した。また、チーム“将来”と同様の活動をクニユフケン他に2グループ率いており、チーム“将来”はその2つのグルー

ブもスカイプ会議に招待することにした。当日は通訳も兼ねて、英語科の教師2名も同席した。

スカイプ会議では、チーム“将来”のメンバーがカメラ越しにグルーウェルにそれぞれ自己紹介し、自分のノートを見ながら質問を行い、グルーウェルがそれに答え、英語科の教師が通訳を行っていった。ときには笑いながら、そしてときには静かにうなずきながら、生徒の話聞いていった。グルーウェルは生徒一人一人が自己紹介するたびに、生徒に「きれいな髪をしているのね」、「あなたは、ジャスティン・ビーバーに似ているわ」など、生徒に肯定的な声かけをしていき、最後に、「あなたたちは、『フリーダム・ライターズ』のファミリーよ。私は本当にそう思っているわ」と生徒らに告げた。生徒ら、そしてクニユフケンもグルーウェルのことばに喜び、自分たちは大きなことを達成したと実感を得ていた。スカイプ会議は1時間の予定だったが、生徒とグルーウェルは終了時間が来ても話をしていた。そこでは、生徒の一人が母親を亡くしたことを話すと、グルーウェルも自分の父親の死を思い出して、ともに涙する場面もあった (ebd., S.72-74)。

カメラ越しであっても、生徒らが会いたいと希望したグルーウェルとスカイプ会議を実現し、彼女と話し、彼女の人柄に触れたこの会議は、生徒にとって印象深い活動となった。生徒らのことばをいくつか挙げておきたい。

- ・ エリン・グルーウェルとのビデオ会議はとても良かった。学校ではまじめにすること、それでも学校生活を楽しめることなどを学び、彼女はすべてを身につけているようでとても尊敬できた。もしエリン・グルーウェルとアムステルダムで会うことができれば、グループ全体にとってとてもいいのに。自分たちの先生はとてもわかりやすく通訳してくれた。(2011.03.11) (ebd., S.73)
- ・ 今日はチーム“将来”にとってともかく最高の一日だった。Miss Gとスカイプ会議をして、それはとても良かった。悲しかったのは、彼女はつい最近、父親を亡く

したということ。みんな彼女の悲しみに共感していた。(2011.03.11) (ebd.)

- ・ 今日 Miss G とスカイプ会議をしてとても素敵な一日だった。それに彼女はとても優しく、今日のなかでも一番良かったと思ったのは、みんな、質問を英語で読み上げて、それに Miss G が答えてくれたこと。Miss G が答えてくれたことを先生たちが通訳してくれたから、彼女の言ったことがよく分かった。とにかく、今日は最高だった。(2011.03.11) (ebd.)

この生徒らのことばから窺えるのは、グルーウェルに会えたということへの感動と教師が同席し、自分たちの手助けをしてくれたことへの感謝である。とりわけ、2-2. で挙げたとおり、教師に対する生徒のイメージは必ずしも良いものではない。しかしながら、このスカイプ会議で英語科の教師が自分たちのために通訳をしてくれたことは、かれらにとっては授業とは違う教師の側面を垣間見ることになり、英語を分かりやすく自分たちに通訳してくれる教師に対し、素直に尊敬し教師に対する見方を変えたのではないと思われる。加えて、教師が同席したということ自体に大きな意味もあると考えられる。教師の同席について、生徒 2 は次のように記している。

担任の先生も一緒にいて、私たちと一緒に楽しんでくれたことも、今日の良かったこと。そして、先生たちが私達を信じようとしなかったことも、私たちはなにかしらやり遂げることができるんだと証明することができた。それにもっとたくさんのがあって、そのすべてに私はまだドキドキしているわ (2011.03.11 生徒 2) (ebd., S.117)

活動をしていくなかで、生徒らは例えば活動の中でクニユフケンが設定した課題に取り組んだように、なにかを成し遂げる力を有しているのだということはクニユフケンには示すことができていた。しかし、そうした自分たちの取り

組みの姿勢や力を教師に直接見せることができていたわけではなく、今回のスカイプ会議が自分たちの力を教師に示す一つの良い機会になったと生徒が捉えているといえる<sup>5</sup>。

### 3. 「チーム“将来”」の活動を通しての変化と気づき

以上、概観してきたとおり、生徒らはチーム“将来”での活動を通してそれぞれ変化を見せている。それは、「問題の多い移民生徒」と学校から見なされるなかで身の置き所をなくしていた生徒らが、学校の中に自分の居場所を見つけたり、そのなかで自分自身の内面と向き合い、こうありたいと思う自分に向き合って努力した結果でもある。そして、そうした変化のプロセスにおいて、さまざまな気づきも得ている。

- ・ 自分にとって一番重要な瞬間は、「変化に乾杯」だった。というのは、自分たちがすべてを変えたいと思っていることをその瞬間から知ったから。(2011.09.16) (ebd., S.93)
- ・ チーム“将来”はすばらしくて、人はいつでも変わることができるんだと知った。何か問題があれば、シュヴェンテックさん (Frau Schwentek) かクニユフケンさんのところに行けば、すべて解決する。これまでの間に、自分は正直であることを学んだし、一人ではやり遂げられなくても、チーム“将来”のように一緒にであればできるんだということも学んだ。それに、他者を受容するということも学んだ。

---

<sup>5</sup> もちろん、「変化に乾杯」の活動で生徒が「学校で成長したい」と述べたように、生徒が教科の成績を向上させ、その上で教師にそれを示そうと努力する様子も日記に記されている。例えば、生徒2の「変わろう！けど、変わることは難しい。英語の成績は良くなってきていると感じるから、他の先生の教科でもそうになりたい」(2010.05.31) (Knüfken mit Teilnehmern des Projektes, 2013, S. 115) という記述がある。こうした学習面とは別に、生徒にとってみれば、このスカイプ会議で自分たちの姿が教師に与えた印象が大きいといえる。

(2011.09.16) (ebd.)

- ・ 自分にとって、チーム“将来”で一番大事な瞬間は？ 自分たちは最初の課題を受け取ったときに、みんながみんな「自分たちにはできない」とか言ったんだ。でも今は、自分たちがこうしたいと思ったことを叶えることができるんだという気持ちを持つことができた。それも、一人ではなく、一緒に。(2011.09.16) (ebd.)

このように、生徒らは自分が変わりたいと思えば変われるんだということ、そして一人では変われなかったり、何かを達成したりできなくても、仲間と一緒にであればそれを成し遂げることができるという気づきを得ている<sup>6</sup>。「問題の多い移民生徒」というカテゴリーを押しつけられたという共通項で結ばれた、表層的な友人関係ではなく、例えば「変化に乾杯」の活動がそうであったように、目標を共有し、それに向かって共に支え合う関係が構築されたこと、そして協同学習の課題を生徒らが協力して取り組むことを通して深めた関係性が、生徒のこうした気づきに大きく影響していると読み取れる。

さらに、2-3. でクニユフケンと生徒の間の関係性の変化について述べたように、生徒らが「ドイツ人」や「ドイツの学校」に対するイメージを、活動の中で変容させていったことが窺える気づきもある。

チーム“将来”で一番重要な瞬間は、クニユフケンさんが自分やチーム“将来”のためにいるんだということに気づいたとき。それで、学校の中には少なくとも一人は自分のために何かをしてくれる人がいることを知った。(2011.10.18 生徒2) (ebd., S.118)

---

<sup>6</sup> クニユフケンとは、課外活動プロジェクト終了後にこの活動を普及するために、参加した生徒数人を描いた短いビデオクリップを作成している。このビデオクリップのなかでも、生徒らは「一人で何もかもしないといけないわけではない」、「他者との協力が重要」といったことをプロジェクトからの学びとして挙げている。このビデオクリップについては、筆者が2015年9月15日にクニユフケンを訪問し、インタビュー調査を行った際にデータの提供を受けた。

この生徒は、ドイツの学校において教師は「問題の多い移民生徒」に対しては何の期待もせず、見放していると思っていたが、「ドイツ人」であるクニユフケンはそのようではなく、自分やチーム“将来”にいる他の生徒の可能性を信じ、課外活動に取り組んでいるんだと気づいた瞬間があったのだろう。ドイツの学校で移民生徒として在籍することは孤立無援であるように思っていたのだろうが、決してそうではなく、ドイツの学校であっても自分のことを理解し、支えてくれる人が少なくとも一人はいるということを前向きに捉えている。

クニユフケンに対し、移民生徒が「自分を信じ、支えてくれるドイツ人」と捉えるようになる一方で、クニユフケン自身は移民生徒に対し、どのような気づきを活動を通して得ているのだろうか。

生徒それぞれに痛みを伴う、複雑な、そしてめまぐるしい物語があるのだということが、ますますはっきりと見えてくる。自分の生徒たちの人生の物語を尊重することが大切であるのに他ならない。(2011.07.14) (ebd., S.87)

活動の中で生徒らと関わり、生徒らの日記に触れることで、クニユフケンは生徒それぞれが持つ物語とそれに注目することの重要性に気づいたといえる。生徒それぞれの持つ人生の物語を通して、かれらがこれまで歩んできた人生や生き方を尊重し、彼ら自身のことをより理解することができる。クニユフケンが活動を通して、移民生徒の側に立って「ドイツ人」や「ドイツの学校」をまなざすようになってきていることは既に述べたが、こうした彼の位置取りや下記のような生徒らに接する姿勢がこの気づきをもたらしたといえるだろう。

フィルムを作るために話し合いをしていて、自分が一体チーム“将来”で何をしているか、特に気づいたことがあった。それは、何もしていないということ。自分は生徒に対して、とても普通に、丁寧に、尊重して、正直に、まっすぐに振る舞った

だけだ。(2011.07.22) (ibd., S.90)

生徒らの厳しい家庭環境や文化的背景の異なり等に関する理解は当然のことながら必要であるが、クニユフケン「移民生徒」であるということ以上に、一人の個として生徒に向き合っていることがこの記述から窺える。もちろん、ここに至るまでに、クニユフケン自身も「ドイツ人」が抱く「問題の多い移民生徒」というように当初は見なしていた。しかしながら、こうしたステレオタイプの判断をいったん留保し、自身の目を通して生徒を捉え直すということ、クニユフケンは常に行っている。

「われわれ（ドイツ人）」と「かれら（移民生徒）」という二項対立的関係性がドイツ社会において作り出されるなかで、クニユフケンは「チーム“将来”」という新たなカテゴリーを移民生徒に与え、そしてそこに自分も入り込み、活動を通して時間や場を共有することで、生徒の変化や彼自身の変化をも生み出したのである。

クニユフケンは、この活動の記録と生徒と自分の日記を一冊の本にまとめ、さらに協力者を得て、活動に関する約30分のフィルム<sup>7</sup>を作成し、その発表会を行っている。そのときの様子を彼は次のように記している。

イベントの間ずっと、パチパチとしたものがあった。二つの世界が出会い、互いを尊重していた。一方の側は、自分が今も生きている世界。大人であり、ドイツ人であり、しっかりとした収入があり、教育が身近にある側。そしてもう一方の側は、移民であり、教育から離れており、若く、収入のない側。日常では、ケバブ店やガソリンスタンドに集まる人々としてグルーピングされる。そうしたグルーピングは今でも好ましいものではない。今夜、それが音を立ててはじけたんだ。生徒たちは

---

<sup>7</sup> DAS WUNDER BLEIBT AUS. Szenen und Menschen eines erfolgreichen Hauptschulprojekts. 2011.

高く評価されたと感じた。やたらに褒める者もいたし、多くはようやく今になって、生徒がこのプロジェクトで達成したことに気がついたんだ。(2011.12.20) (ebd., S.97)

フィルムの上映と本の朗読が行われた夜の雰囲気を、クニユフケンは「われわれ（ドイツ人）」と「かれら（移民生徒）」の出会いとして描いている。二項対立で交差することのない世界ではなく、「われわれ」からステレオタイプを押しつけられている「かれら（移民生徒）」が何を思い、ドイツ社会で生き、このプロジェクトで何に取り組んできたのかを示した。そこで描かれた「かれら（移民生徒）」のなかにいる多様な移民生徒それぞれと「われわれ」はこの夜に出会い直したと換言することもできるだろう。そして、そこに集まった多くの者に移民生徒もさまざまな可能性を有しているのだという気づきを与えたともいえるだろう。

#### 4. おわりに

##### — 「私」を物語ること、そしてそれに触れることの意味—

以上、ドイツ版「フリーダム・ライターズ」といえるプロジェクトについて述べてきたが、「私」を物語ることとそれに触れることの意味に注目しながら、若干の考察を示し、おわりに代えたい。

まず、移民青少年にとって、このプロジェクトにおいて日記を記し、「私」を物語ることには、自己に向き合い、自己を捉え直すという意味があった。単に自分に向き合うという以上に、この課外活動のプロジェクトに参加した生徒と互いが書いた日記の読み合いを行うことによって他者との関係性を編み直す契機にもなっていた。これはもちろん並行して行われた協同学習の活動なども功を奏しての関係性の編み直しであるが、これまで見てきた通り、生徒自身の



変容、生徒間ならびにクニユフケンと生徒間の関係性の変容から、それは読み取ることができる。そして、そうした関係性のなかで、「変化に乾杯」の活動に見るように、変わりたいとの願いや困難を抱えながらも学校修了資格を得たいという思いをみなで共有し、それに向かって自己実現していくプロセスが生じていることも窺える。

一方で、社会教育士であるクニユフケンについては、移民生徒に対する理解の深化が第一に挙げられるであろう。グルーウェルの教育実践である「フリーダム・ライターズ」から、生徒が自分自身に向き合える環境づくりや関係性の構築に資する活動の示唆を得ている。そこから得られた示唆を彼が向き合っている生徒の状況に応じて工夫し、生徒自身が自分に向き合い、自身が目指すべき目標を明確にし、そこに向かって突き進めるような環境を作り出している。これは生徒が厳しい環境にあっても個々に自立していけるような支援となっている。また、活動のなかで関係性を編み直す契機をもたらすことで、厳しい環境のなかでも自分と同じように目標を持ち、互いに支え合える仲間づくりが進められ、集団としての関係性の回復といった効果をももたらすことに成功している。これは、生徒らの日記にあったように、一人では実現できなくても、チーム“将来”のメンバーと一緒にいるから実現できたといった記述からも明らかである。こうした機会を社会教育士として課外活動の場面で生徒に提供することができたといえる。

社会教育士であるクニユフケンが主導した課外活動プロジェクトによる生徒の変化やその成果を教師がどのように捉えたのかという点は、残念ながら現状の資料からは窺えない。しかしながら、スカイプ会議での教師の同席や教師が期待していなかった修了資格取得を生徒が達成したということから、少なくとも否定的には捉えていないと考えられる。こうした側面からの分析はさらに進められる必要がある。また今回のクニユフケンのプロジェクトは、社会教育士と移民生徒の間で課外活動の時間に展開されたものであるが、これを教師と生

徒の信頼関係構築のための取り組みとして、学校の日常にどう組み込みうるのかという点は今後の検討課題といえる<sup>8</sup>。

これらは、移民生徒とクニユフケンのそれぞれの立場から捉えられる成果であるが、同時に注目しておきたいのは、「われわれ」に位置するドイツ人社会教育士に対し、信頼関係の下、移民青少年が自己表出をした、つまり「私」を物語ったという点である。この自己表出は、生徒間で、生徒とクニユフケンの間で、そして生徒、クニユフケンが一体となり、ドイツ社会に対して行われたものである。これまでの活動記録とクニユフケン、生徒らの日記をまとめて書籍を出版したこと、さらにフィルムを作成し、発表したことは、「われわれ」と「かれら」という二項対立の関係性のなかで、それぞれが個性を持ち、多様である「私」の集合体である「かれら」に包含されるその多様性を示すことにもなっている。この課外活動プロジェクトは、一枚岩の「かれら」ではなく、多様性を構成する一つの「私」の声を上げているものにもなっている。

では、「われわれ」に位置づけられるマジョリティは、こうした「私」の声を如何にして受け止めるのであろうか。また、それはとりわけ教育の場において、どのような態度を持って受容されうるのだろうか。これらを検討する際に、この課外活動プロジェクトにおけるクニユフケンの位置取りは参考になるであろう。「われわれ」に属するクニユフケンは、課外活動プロジェクトを通じて、「かれら」により近い位置に自らの位置取りをずらしてきた。完全に「かれら」になるのではなく、それに近い立場にありながらも、「われわれ」と「かれら」の間に立ち、客観的に観察を行う者の存在は、「私」を物語り、その物語を他者に対し、意味を持ったものとして響かせるためにも必要不可欠である。

移民生徒の学校適応やドイツ社会への統合に資する学びを提供するには、移

---

<sup>8</sup> 教師と生徒の信頼関係構築に資する取り組みであるが、それを教師にどのように広げていくかという点が課題であることは、クニユフケンも認識している（2015年9月15日のインタビューより）。

民生徒が「私」の声を発する力を獲得し、また、「われわれ」が「かれら」の中に存在する多様な「私」を理解するような教育実践を生み出し、それに取り組んでいく必要がある。本論で注目したこのプロジェクトは、課外活動であったが、それを教師が正課のなかで取り組んでいけるような取り組みに発展させる必要もあるだろう。

こうした取り組みの拡充のために、クニユフケンはこの課外活動プロジェクト終了後、社団法人を立ち上げ、2016年にはルール地方の秀でた活動を行う人物に与えられる賞（Talent-Award-Ruhr 2016）を受賞し、このプロジェクトのノウハウを普及するために活動の拡大を進めている。そこで設立当初の名称（Schreibumodus e.V.）ではなく、心機一転、グルーウェルが設立した「フリーダム・ライターズ」に近い名称が考えられたが、最終的には「変化をもたらす書き手たち（ChangeWriters）」という名称に落ち着いた。「われわれ」と「かれら」という二項対立のなかで、「かれら」という枠に押しとどめられている「私」にも変化をもたらし、そして、「われわれ」と「かれら」の関係性をも変化させるこの活動のコンセプトを十分に表したものといえる。「私」を物語ることが、多文化社会における異文化間関係性をどのように変容させるのか。「われわれ」と「かれら」の二項対立が極端化してきている今日のドイツ社会において、その関係性を変容しうる異文化間教育の実践として、今後も注目していく必要があるだろう。

### <参考文献>

- ・ 小川修平（2010）「多文化教育実践モデルの社会心理学的分析－エリン・グルーウェルによる人種間対立を改善する授業実践を事例として－」東京外国語大学多言語・多文化教育センター『多言語多文化－実践と研究』Vol.3、102－124頁
- ・ アフマド・マンスール著、高本教之ほか訳（2016）『アラール世代－イスラム過激派から若者たちを取り戻すために－』晶文社

- ・ G. Bensberg (2013): *Survivalguide Schreiben*. Springer.
- ・ E. Gruwell (2007): *Teach with your Heart. Lessons I learned from the freedom writers*. Broadway Books.
- ・ E. Gruwell (2009): *Teaching Hope. Stories from the freedom writer teachers and Erin Gruwell*. Broadway Books.
- ・ J. Knüfken (2012): Das Wunder bleibt aus-Ein erfolgreiches Hauptschulprojekt. In: *Jugendhilfe & Schule. Inform.* 2/2012. LVR Landesjugendamt Rheinland.
- ・ J. Knüfken mit Teilnehmern des Projektes (2013): *Das Wunder bleibt aus. Tagebuch über ein erfolgreiches Hauptschulprojekt*. CARE-LINE.
- ・ L. Lundmark (2008): Erin Gruwell and The Freedom Writers Diary: An Experiment in Pedagogy. 和歌山大学教育学部『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』58、127-131 頁

#### <参考 URL >

- ・ ChangeWriters e.V. Deine Geschichte, deine Zukunft.  
HP : <https://www.changewriters.de/>
- ・ Metalog HP : <https://www.metalog.de/>

#### <付記>

本研究は、日本学術振興会学術研究助成基金若手研究 (B) 「青少年の日常性を出発点とした異文化間教育—多文化社会ドイツの現実に学ぶ—」(課題番号 15K17371) の助成を受けて行われたものの一部である。